

人生の一般法則

—— J. S. ミルの政治経済学に依拠して ——

前 原 正 美

- I はじめに
- II 利己心は感動の心に結びつく
- III 感動の心は無限の愛の心に結びつく
- IV 人生には人間の幸福へ到達する一般法則がある
- V おわりに

I はじめに

人生には、幸福に^{たと}辿り着くための一般法則が存在する。

たれしも人は、自ら定めた人生の目標にむかって利己心を自由に発揮し、積極的に自己努力を払ってゆけば、そのプロセスのなかで豊かな自然的感情を育み、自分の個性＝自己能力を著しく高め、高い共感能力を養って、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見する。その発見こそ、感動の心の発見であり、自己の発見＝生命^{いのち}の発見である。

自己は常に他者のなかにある。それゆえ人は、自分自身と一心同体となりうる他者に共感し、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見するや、自らの生命それ自体に感動し、自らの心に映じた感動を広く社会に伝えてゆきたい、という公共心に目覚めるのである。たとえそれまで私的利益の増大、たとえば地位・名誉の向上や金銭の獲得に幸福の価値基準をおいていたにせよ、感動の心を発見するや、たれしも人は、自分と同等に他者を愛する隣人愛＝人間愛を養い、その愛の心をさらに深く掘り起こし、ついには自らの奥底に宿る神の無限の愛の心に目覚め、そのかぎりない愛を自らの仕事を通じて世に伝えてゆく、という神に与えられた使命を果たしてゆくようになるのである。

総じていえば、それが幸福に辿り着くための人生の一般法則である。その人生の一般法則を簡単に図式化すれば、以下のようになる。

基本的には人間は、利己心の自由な発揮→生活水準の向上→知的・道徳的水準の向上→豊かな自然的感情^{かんよう}の涵養と個性＝自己能力の発展→共感能力の向上→自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見→生命の発見＝感動の心の発見→自己の発見→幸福の価値基準の転換→公共心の育成→隣人愛＝人間愛の認識への到達→神の無限の愛の認識への到達→神に与えられた使命の遂行という経路を辿り、自己実現＝人間的完成に到達してゆくのである。

このことは、人の人生には生きる目的がある、ということの意味する。人生の目的とは、自己実現＝人間的完成にこそあるのである。自己実現＝人間的完成とは、自分自身を人間的に完成せしめること、つまり人間の本質としての無限の愛の心に目覚め、最高度の自分自身を創造することにある。

人間の〔人生における〕目的は、……自分自身のあらゆる能力を、完全で矛盾ない全体へと、最高度に、そして最も調和的に発展させてゆくことにある（〔2〕『自由論』280頁）。

神はすべての人間に三つの心を与えている。具体的にはそれは、利己心、公共心、無限の愛の心である。それゆえ人間は、人生の目標を自ら設定し、その目標にむかって利己心を自由に発揮してゆけば、そのプロセスのなかで感動の心を発見し、公共心を養って、ひいては無限の愛の心に目覚めて、そのかぎりない愛を広く高く世に伝えてゆくことに神に与えられた使命を見いだし、そしてその使命を成し遂げた時、神に生命を召されるのである。

本論文の目的は、以上のような人生の一般法則について、J. S. ミルの政治経済学に依拠しつつ⁽¹⁾、考察することにある⁽²⁾。

II 利己心は感動の心に結びつく

ミルの考えでは、人間本性は、利己心と公共心とに大別して理解しうる。人間には自分自身の自然的感情からおのずと湧きあがる欲望があるが、ミルは社会的法＝社会的正義の範囲内で是認される欲望を賢明な利己心と呼び、その法＝正義を犯す欲望を偏狭な利己心と呼んだ。通常ミルが「利己心」というばあい、それは賢明な利己心のことである。

他方、公共心とは、自分個人の私的利益を考えず、ただ社会的利益のために貢献・奉仕したいと考える人間の心である。

利己心と公共心とは、ともに人間本性である以上、すべての人間が本来、持ち合わせているのだが、基本的には人間は、公共心よりも利己心が根強く作用する。それゆえたれしも人は、何よりもまず、自分自身の仕事に利害関心を持って、利己心を自由に発揮することから自らの人生を出発してゆかなければならないのである。

物質的な楽しみや富を求めることでさえ、人間の最大の知的・社会的な成果への道を切り拓く物質的な条件を準備する。人間はその成果を得ようとするエネルギーさえあれば、利己心を発揮してゆくであろうし、人間のエネルギーは外部的な環境の完成だけでなく人間の内的

な完成にますます役立ってゆくようになるのである（〔4〕『代議政治論』402頁）。

たれかをもっと幸福にしようとか、国家や隣人たちの幸福を促進しようとか、自ら道徳的に向上しようという利己心を持たないで、満足しきっている人や家族は、われわれに賞賛も是認もよこさない（〔4〕『代議政治論』400頁）。

自分の環境を改善しようとする期待に満ちて活動している人は、自分と同じことをしている人びと、または同じことに成功した人びとに対して、好意を感じるものである。……しかし他人が所有しているものを望みながら、それを手に入れようと努力したり、エネルギーを注ぐことのない人びとは、自分自身で試みて努力しないことについて、人生が幸いしないとたえず不平をいい、自分が手に入れたいとおもっているものを所有している人びとに対し、妬み心や悪意をひどく持つようになる（〔4〕『代議政治論』399頁）。

ミルの考えに従えば、人間が利己心を持つことの重要性は、以下のように整理して示しうる。

(1) まず第一に、利己心は人間一人ひとりの人生に目標を与える、という点で重要である。

一般に人間は、自分の努力が自分自身の私的利益の増大と結びつかない制度のなかでは、自己努力への契機それ自体が失われてしまいがちである。しかし反対に、自分自身の自己努力がひとつの成果となつてはね返る制度のなかでは、自分の境遇改善・地位向上を図りたい、という欲望が湧きあがり、人生に対する積極的な心が生まれる。

ミルの考えでは、人生の出発点において最も大切なことは、何かを成し遂げたい、とおもう心を持つことである。このばあい、動機は何でもよい。たとえば金持ちになりたい、立身出世を遂げたい、という動機であれ、それが人生に目標を与えることになれば、人はその目標にむかって利己心を十分に発揮し、最大限の自己努力を払うようになるのである。

人間を本当に動かす力は、その人自身の主観的感情であり、その力は正確に主観的感情の強さに比例する（〔4〕『功利主義論』491頁）。

要するにミルは、人間が利己心を持つこと自体が、自分自身に対する利害関心を有している証^{あかし}なのだ、と考える。

ミルの考えでは、社会における最大の敵は、人間の自己中心主義であるが、まさしくそれは、人間の自分自身に対する無関心にこそ根本的原因があるからである。

自分自身に利害関心を持たぬ人間が他者や社会に対して無関心、無感動、無責任な人間となるのは当然のことである。そしてこうした人間こそが、自分さえよければそれでよい、という自己中心主義に陥り、社会的規範を犯し、したがってまた社会秩序を混乱状態に導く元凶となるのである。

表現を変えれば、利己心とは、自己能力を他者や社会に是認されたい、という人間の自然的感情である。

それゆえ利己心を発揮し、自分の欲望を満たしたいと考える人間は、他者や社会の是認＝共感を獲得できない行為は自制する。むしろ逆に自分の欲望を満たすために、社会的是認＝共感を獲得できるように行動し、自己能力を使用する。そうでなければ、私的利益の増大や立身出世は見込めない。

他方ではまたそうした人間は、他者を認めたい、是認＝共感したい、と考える。というのは他者の能力や長所を自分自身のなかに組み入れることは、自己能力の向上につながり、さらには自己の人間的成長に結実するからである。

いずれにせよ利己心を持つことは、社会的法＝社会的正義のなかで、自己能力を自由に使用し、自分自身の目標あるいは私的利益の増大を実現せしめるばかりか、結果として社会的利益の増大を生みだし、安定した社会秩序の形成に結実するのである。

(2) 第二に、利己心の自由な発揮は公共心の育成に結実する、という点で重要である。

ミルの考えでは、たれしも人は、自分自身に対する利害関心を強め、自分が定めた人生の目標にむかって自由に利己心を発揮してゆけば、生活水準を高め、著しい境遇改善・地位向上を果たしてゆくだろう。その一方では、人は自分の仕事を通じて自己能力を訓練・陶冶^{とうや}し、そのプロセスのなかで知的にも道徳的にも成長してゆくだろう。その結果、人は人間としての自然的感情を豊かに培い、したがってまた共感感情を豊かに育み、その共感能力を飛躍的に高めてゆくだろう。

共感能力が高まれば、感動の心の発見はそれだけ容易になる。そして人は、その発見によって公共心を培った人間へと成長するのである。ここに人生の目標は、人生の目的へと転化する。その結果、人の生きる意味は、物的利益の増大や地位・名誉の向上にではなく、世に感動を伝えるため自己能力を最高度に高め、自己実現＝人間的完成を目指すことにある、と認識するに至るのである。

要するにミルは、私欲を捨て無私の心を培うには、まずもって私欲を持たねばならぬ、と主張するのである。

明らかにミルは、人間は私欲＝利己心を自由に発揮するに至れば、自然的感情＝共感感情を豊かに培い、自己の発見＝感動の心の発見に到達し、それを人生の転機として公共心を育

成しうる、と考えたのである。逆にいえば人間一人ひとりが公共心を育成するためには、たれもが自分の利己心を自由に発揮し、それによって他者に対する観察力＝想像力を豊かに育み、共感能力を高めてゆかなければならない。

たとえば自分が他者を観察し、その他者に共感し、感動したとする。その感動は、しかし実は、自分本来の個性＝潜在的な自己能力の発見に他ならず、つまりは自己の発見を意味するのである。

人生における幸福の価値観は、その自己の発見＝感動の心の発見によって一変する。なぜならば感動の心を発見しえた人間は、もはや目先の私的利益に惑わされず、どこまでも自己を貫いて、自分の心に映じた感動を世に伝えてゆくという使命の達成に、幸福の価値基準を見定めるようになるからである。

たれしも人は、利己心を自由に発揮し、自ら定めた人生の目標にむかって積極的に自己努力を払ってゆけば、自分の仕事や人生上の経験、自分自身と一心同体になりうる他者や偉大なる大自然との出逢いを通じて感動の心を発見し、したがってまた公共心を育成することによって、おのずと隣人愛＝人間愛の認識へと到達してゆくのである。まさしく愛こそは、人間の普遍的原理であり、たれしも人は、その隣人愛＝人間愛の認識への到達によって無私の心を培い、すべての自己行為に対し見返りを求めぬ社会的存在となりうるのである。

人間には本来、他人の利益は自分の利益だという感情がある。社会連帯が進み、社会が健全に成長すれば、たれもが他人の福祉にますます強い個人的関心を事実抱くようになるばかりか、たれもが自分の感情と他人の善をますます同一視するようになり、少なくとも他人の善をますます実際に考えるようになる（〔3〕『功利主義論』494頁）。

第三に、最先進国においては、資本主義的企業（その主軸は株式会社である）の果たす社会的役割は大きく、したがってまた資本家の社会的使命は極めて重要である。資本家の社会的使命とは、社会の大多数の割合を占める労働者の利己心を十分に発揮させることであり、同時にまた企業活動を通じて社会の一般的利益＝人間の幸福のために貢献することである。

現代日本では、もはや資本主義的企業は、たんなる私的・個人的存在ではなく、公的・社会的存在である。それゆえ日本企業は、社会の一般的利益＝人間の幸福の増大のために積極的に貢献・奉仕してゆかねばならないが、そのためには労資双方が十分に意思の疎通を図り、企業それ自体の自己改善に努める必要があるのである。

総じていえば資本主義的企業の社会的使命は、社会の一般的利益＝人間の幸福のために積極的に貢献・奉仕することにある。

資本主義的企業の社会的使命は、とりもなおさず資本家自身の社会的使命である。

それゆえ資本家は、自らの社会的使命を社会の一般的利益＝人間の幸福に貢献することに見定め、まず社会全体の幸福を考えるべきである。とりわけ大企業＝株式会社の資本家がその社会的使命を認識・自覚することは重要である。というのは日本の大企業は、系列企業を多く持っており、また社会全体に与える影響力が大きいからである。その意味では日本の企業の問題は、国家全体の問題である。

したがって現代の日本の資本家に求められるのは、まず第一に、発想の転換であり、つまりは経営理念の改革である。

資本家の最も大切な仕事は、一体、何のために企業活動を行うのか、という経営理念を労働者に対して明確に示すことにある。

これまで日本の資本家は、企業の目的は最大限の利潤追求にある、と考えてきた。その根底にある経営理念は、自らの企業活動による私的利益の追求が結果として社会の一般的利益の増大と結びつく、というものであった。

しかしいまや、この経営理念が現代という時代のなかで適用しなくなったことは、明らかである。

このことは、株式会社をはじめとする多くの日本企業が利潤の増大＝私的利益の増大を追い求めるあまり、労働疎外による労働者の肉体的・精神的健康を喪失せしめてきたこと、さらにはまた無意味な土地投機や環境破壊を行い、社会の一般的利益に反する企業活動を展開してきたことを、直視すれば明らかである。

ミルの考えでは、「利己心」の概念は、二段構えで理解されなければならない。

まず第一に、利己心とは、自分自身の私的利益の増大を最優先して考える人間本性である。

そして第二に、利己心とは、社会の一般的利益＝人間の幸福を最優先して私的利益の増大を追求する人間本性である。

戦後の高度経済成長を支えてきた日本人の利己心は、第一の意味での利己心であるが、この成長過程では、その利己心の自由な発揮の結果、富裕が社会全般にゆき渡った。しかるに1985年のプラザ合意以後、円高の急激な進行にもかかわらず、政府によるケインズ政策や企業努力が功を奏し、平成景気といわれる好景気が生じたが、そのなかで企業も日本人も自分本来の姿を見失っていった。とりわけ日本の大企業は、私的利益が増えさえすればよいと考え、土地や株に対する異常な投機を繰り返し、あるいはまた不必要な商品をふんだんに作りだした。要するに日本の企業は、いたずらに私的利益を追い求め、利己心の枠を超えて、たんなる欲望の妄者となり下がってしまった。いいかえれば多くの日本企業は、社会の一般的利益＝人間の幸福を考えるのではなく、自分さえよければそれでよいという社会的規範を

失った状態に陥ったのである。

しかし本来、人間の欲望が是認されるのは、他者や社会からの共感を得られるかぎりにおいてである。そしてそのかぎりにおいて、人間の欲望は、賢明な利己心として肯定されるのである。その共感の範囲を超えて、むきだしの欲望のままに人間が行動すれば、社会秩序が混乱してしまうだけではなく、大きな社会的損失が生まれるのである。となれば結局、その損失は社会全体で補わなければならなくなる。それですむならば問題は簡単だが、失われた大自然や環境は基本的には回復不可能である。

ミルの考えでは、最先進国のばあい、資本の増加につれて、人口が増加すると、食糧供給量の増加が余儀なくされるが、となれば自然必然的に人間の大自然に対する支配力は強まってゆく。つまり無尽蔵な土地開発や河川の埋め立て、野山の破壊が急速に進展してゆく。

人間のための食糧を栽培しうる土地は、かなりの程度に耕作されており、花の咲く未墾地や天然の牧場はすべてすき起こされ、人間が使用するために飼われている鳥や獣以外のそれは人間と食物を争う敵として根絶され、生垣や余分の樹木はすべて引き抜かれ、野生の樹木や野の花が農業改良の名において雑草として根絶されることなしに育ちうる土地がほとんど残されていない——このような世界を想像することは、決して大きな満足を与えるものではない（〔1〕『経済学原理』Ⅲp. 756, ④108-109頁）。

政治経済学が考察の対象とする大自然は、基本的には交換価値を持つものに限定される。しかし人間が目先の私的利益に眼がくらみ、将来に対する思慮もなく大自然に対する支配力を強めてゆけば、現在は無償で得られる空気や水でさえも市場で交換価値を持つようになるだろう。

空気は富ではないが、人類は、空気を無償で得られるために、はるかに富裕となってゆくのである。だがもし自然界の破壊のために、大気が消費者にとり、あまりに少量となるか、あるいは独占しうる状態になれば、空気は極めて高い市場価値を有するようになるだろう（〔1〕『経済学原理』Ⅱp. 8, ①40頁）。

それゆえ最先進国に生きる人間に要請されることは、意識革命である。

こうした問題をこれ以上、深刻化させず、さらにはまたこれまでの社会的問題を解決してゆくには、自己利益を優先的に考えるのではなく、社会の一般的利益を優先的に考え行動する利己心のあり方が大切となる。つまり先に遂げた第一の意味での利己心から第二の意味で

の利己心への転換が重要となる。

現代の日本企業の資本家に求められることは、その意味での逆転の発想であり、経営理念の改革なのである。

繰り返しになるが、大体、現代の日本企業の資本家は、社会の一般的利益＝人間の幸福を考えているのではなく、社会や労働者を自分個人の私的利益を得るための道具、としか考えていない。

しかし資本家は、企業があつて社会が存在するのではなく、社会が存在しえてこそ企業が成り立つということを識らねばならない。

企業もまた、個人と同様、市民社会を構成する一員なのである。それゆえに社会に大きな影響をもつ大企業＝株式会社を経営する資本家は、いまや企業の目的は社会の一般的利益＝人間の幸福のためにある、という社会的使命の自覚のもとに、社会の一般的利益を優先的に考えた企業活動を行うことによって私的利益の増大を図る、という理念を早急に確立する必要があるのである。

したがって資本家は、何よりもまず、自分に与えられた社会的使命を認識しなければならぬ。資本家の社会的使命は、企業活動を通じて社会の一般的利益＝人間の幸福に貢献する、ということにあるのである。

そもそも人間の使命が自分の仕事を通じて世に感動を与えることにある以上、資本家は企業の活動を通じて国民の幸福に役立つ商品やサービスを提供し、それによって世に感動を与えてゆく使命がある、といわねばならない。

それゆえ資本家は、何よりもまず、社会全体の幸福を考えるべきである。つまり資本家は、いたずらに私的利益を追い求めるのではなく、社会全体の幸福につながるものだけを社会に提供し、できるだけ多くの人間に喜びを与えてゆかなければならない。

企業を支えるのは人であり、つまりは労働者である。

労働者は資本家がいなければ何もできないが、資本家もまた労働者がいなければ何もできない。その意味では、資本家にとって労働者は、人材ではなく、人財である。つまり労働者は、利益を生みだす材料＝道具ではなく、その一人ひとりが創造的・独創的価値を持つ人的財産である。

もとより資本主義的企業は、その企業に特有な創造的・独創的価値を生みだすことができないければ、持続的な発展・隆盛を見込むことができないが、その価値の源泉は労働者一人ひとりの自分本来の個性＝潜在的自己能力のなかにこそ存在するのである。

このように考えれば、資本家は労働者一人ひとりの自分本来の個性＝潜在的自己能力を引きだしてゆくことが重要な仕事となる。

およそ人間が育つには時間がかかる。しかし資本家が労働者の自主性を重視し、労働者の自己能力が育つために必要なかぎりの費用を投入するならば、おのずと労働者の仕事に対する取り組み方が変わり、やがて労働者は自分のなかに宿る自分本来の個性＝潜在的自己能力に目覚めるであろう。その結果、労働者は、人生の目的が自己実現＝人間的完成にある、と気づくだろう。それによって労働者は、企業のみならず広く社会や環境に対する関心を強め、自分の仕事を通じて社会の一般的利益のために貢献したい、と考えるようになるだろう。

III 感動の心は神の無限の愛の心に結びつく

1 感動の心の発見は人生を一変させる

およそ人間は、感動の心を発見するや、人生を一変させる。たとえそれまで私的利益の増大、たとえば地位・名誉の向上や金銭の獲得に幸福の価値基準を求めているにせよ、感動の心を発見するや、生命を賭けるに足る人生の価値を発見し、その感動の心を自らの仕事を通じて自己表現してゆくことに、生きる目的を見いだすのである。

たれしも人は、自ら定めた人生の目標にむかって利己心を自由に発揮してゆく時、私的利益の増大を目指しているが、しかし感動の心を発見するや、人生の目的とは自らの心に宿る感動を世に伝えてゆくことである、と認識し、そのゆえに最高度の自分自身を創造することに生きる意味を見いだしてゆくのである。したがって感動の心の発見は、人間の幸福とは、私的利益の追求にではなく、精神的利益の充足にこそある、という価値転換をもたらし、人間とは心である、という認識へと人間を到達せしめる。したがってまた感動の心の発見は、人生の目標から人生の目的への転換へともたらしてゆく。つまり人間は、感動の心を発見するや、人生には生きる目的があり、人生の目的とは自己実現＝人間的完成である、という認識に到達するのである。

そもそも感動とは、これさえあれば他にはもう何もいらぬ、という人間の自然的感情からおのずと湧きあがる至上の喜びの感情である。いいかえればそれは、自らの心に宿る想いの発見であり、真に自分が探し求めていたもう一人の自分自身の発見なのである。実をいえば人間は、この世に生まれでた当初からもう一人の自分、すなわち究極の理想の人間を探し求めて生きているのである。たれしも人は、共感能力が著しく高まれば、他者のなかにその究極の理想の人間像を発見し、自らの想いをよみがえらせるのである。その時、人はその究極の理想の人間を心に宿し、より完全なる自分自身を創造するために新たな自分自身を創造してゆくのである。その意味で人の人生において、自己の発見＝生命の発見ほど大切なことはないのである。

こうして人は、感動の心を発見し、自己の発見＝生命の発見に辿り着くと、自己〔現在の自分〕と自己〔究極の理想的自分〕との一体感を目指し、自らの感動を世に伝えてゆきたい、という公共心が芽生え、自己と他者との一体感をも培ってゆくのである。

人間は、〔感動の心を発見し、自己を発見すると〕、たれもがまるで本能的に、自分は当然他人に配慮する存在〔感動を与えてゆく存在〕である、と考えるようになる。……自己と自己との一体感が完全ならば、自分にとってどれほど有利な条件でも、他人の利益にならないものはたれも考えたり望んだりしなくなるのである（〔3〕『功利主義論』494頁）。

まさに感動の心の発見こそは、人の人生に幸福概念の価値転換をもたらし、人は一体、何のために生きるのか、という明確な解答を与えるのである。それゆえ人の人生において、感動の心の発見ほど重要なものはない。

2 感動は心は感謝の心を養う

感動の心の発見の重要性は次のように示される。

まず第一に、感動の心を発見しえた者は、人間それ自体に対する感謝の心を養う。

感動の心を発見しえた人間は、自らの生命の尊さを発見しえた者である。自らの生命の尊さを識る者は、人間それ自体の生命を識る者であり、したがってまた人間それ自体の生命に対する畏敬の念を有する者である。いいかえれば人は、すべての人間に対する感謝の心を培うのだ。

それゆえ感動の心を発見しえた者は、すべての人間に対する感謝の心を培うのである。その感謝の心は、何よりもまず、両親に対してむけられる。

自分自身の生命が存在するのは、両親の生命があってはじめて存在するといえる。そして人間にとって自分自身が存在するのは、両親の願いによるものである。両親が自分自身を創造したい、と願わなければ自分自身は世に存在することはなかったであろう。つまり両親が自分自身の存在を願えばこそ、自分自身は世に登場してこれたのである。そう考えれば、人間の生命は両親に望まれたものであるといえる。そしてまたその両親もそれぞれ、そのまた両親に望まれてこの世に登場してきたのだ。

両親があるのは、そのまた両親があるお蔭である。そうやってずっと辿ってゆくと、自分の生命は何千人も何万人も何億人もの先祖を経て、自分の両親へと受け継がれ自分自身へとつながっていることがわかる。見方を変えれば、自分があるのは両親があって、祖父母があって、その先祖があるからだ。

両親や先祖からすれば、自分の子や孫に対しては幸福になってもらいたい、と願うだろう。自分の生命にはそうした先祖代々の幸福への願いが込められているのだ。

このように考えれば、自分自身の生命は先祖の想いを受け継いで与えられてきていることがわかる。

いいかえれば人間は、両親や先祖の想いを受け継いで、幸福にならないければならない使命を担ってこの世に登場してきたことがわかる。

人類の幸福を実現するための直接的な影響という点では、他のすべてのことよりも家族関係のことがより重要である（〔2〕『自由論』335頁）。

自分の両親や先祖に感謝しうる人間は、過去に生きたすべての先人に対する感謝の心を有することができる。

いかなる時代であれ、人間は全体の幸福を考えている。ゆえに人間一人ひとは、全体の幸福のために生きてきたのだ。たとえば人間は後世の時代のことを考えて、資源を用いてきた。魚を捕りすぎれば、自分の子や子孫の代まで伝わらないと考える者は大勢いた。そうした考えの持ち主がいて、自分が生きた社会と後世の時代のために生命を注いできた人が存在してきたがゆえに、現代という時代が存在する。その意味で現代は、先人の功績によって作りあげられてきたものである。その時代ごとにいろいろな問題が存在したであろう。しかしその問題を解決しようとして自らの生命を注ぎ、世に愛をふり注いできた先人がいたのだ。

後世に名の残っている人びとにかぎらず、名の残っていない一般の人びとも同じようにまた懸命に生きてきた。現代という時代は、そうした先人が作りあげてきた社会の延長線上に位置しており、すべての人間はそうした先人の様々な恩恵を受けているのだ。

ソクラテスは死刑にされた。しかしソクラテスの哲学は、大空の太陽のようにさし昇り、その光輝を知的天空のすみずみにまでふりそそいだ（〔2〕『自由論』251頁）。

それゆえにこそ現代に生きる人びとは、この時代の幸福のため、さらには後世の幸福を考えて生きてゆかねばならない。その意味では人間は、前の時代に生きた人びとの想いを受け継いでいる、といえるであろう。その想いは人それぞれであり、歌によって世の中をよくしたい者、企業の設立によって技術革新をおこし世に貢献したい者、漁業を受け継いで後世へとつないでゆこうと考える者、農業を受け継ぎ後世へ美味しい米を伝えてゆこうと必死で働く者、時代をよくするために教育によって子供を育て人材を育成しようとおもう者もあるだ

ろう。

人間は人それぞれにそうした先人の想いを受け継いで、それを現代に生かし、さらには後世へと伝えてゆこうと考えている人びとのお蔭によってつくりだされてきたのだ。

人間は人それぞれの心に本来宿る想いというものを探しだし、つまりは自らの感動の心を発見しさえすれば、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見して自らの生命それ自体を発見し、自らの使命を果たし、全体の幸福のために貢献してゆけるのである。

だからこそ人間は、感動の心を発見してその感動を世に伝えてゆかなければならないのだ。そのためには自らの想いを発見し、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見してゆくことが不可欠である。

このように考えると、人間の生命は、自分ひとりの力では存在しえなかったことがわかるであろう。自分自身がいま在るのは、両親や先祖のお蔭であり、広くいえば先人のお蔭である。そしてまた同じ時代に生きる多くの見知らぬ他者のお蔭なのである。

人間はけっして自分ひとりの力では生きられない。社会とは人間が支えあい、励ましあい、助けあって生きる人間関係で成り立っている。人間一人ひとりが自分の好きな仕事、あるいは自分が本当にやりたい仕事に従事し、自らの使命を果たしてゆくためには他人の存在が必要なのである。

人間が自分の使命を果たすためには、他人の存在が必要である。たとえば歌手が歌を歌うことで世に感動を与え、それによって自らの使命を果たし、その仕事ひとつに専念できるのは、他の人びとが存在するお蔭である。

食糧の生産に使命を見いだす者をはじめ、多くの見知らぬ他者の存在があればこそ、人間は自分の使命を果たしてゆけるのだ。そのように考えれば、人間はすべての人びとに感謝する心を養う必要がある。そしてすべての人間に対する感謝の心は、感動を心を発見し、自らの生命の尊さを識ることによって生みだされるのである。

3 感動の心は神の無限の愛の認識に結びつく

第二に、感動の心を発見しえた者は、隣人愛＝人間愛を養い、神の無限の愛の認識に到達する。

感動の心を発見しえた者は、自らの生命を発見し、自らの生命の尊さを識るがゆえに、すべての人間の存在価値の大切さを識る者である。感動の心^しの発見とは、一言でいえば生命それ自体の発見であるが、そのゆえに感動の心^しを発見しえた者は人間それ自体の生命の尊さを発見した者といえる。だからこそ感動の心^しを発見しえた者は、自分の生命を世のため人のため使用しようと考え、そのために人生の目的を自己実現＝人間的完成に見いだし、自分自身

の能力を鍛え、自然的感情を陶冶し、そして高い人格を形成し、自分と同等に隣人を愛するという隣人愛＝人間愛を養ってゆけるのだ。

神は無限の愛である。愛とはすべてを受け入れることである。したがって無限の愛なる神は、すべての存在を常に受け入れている。

自らの生命の尊さを識りえない者は、自分自身を愛することができず、したがってまた他者を愛することができない。そのゆえにそうした人びとは、自分を受け入れることができず、他者をも受け入れることもできず、神の無限の愛を識ることができないのだ。

しかし自らの心に宿る感動を発見し、自らの生命を識りえた者は、人間それ自体の生命の尊さを識る者であるがゆえに、すべての人びとをありのままに受け入れ、すべての人に愛を施すことができるのだ。したがって感動の心を発見しえた者は、神の無限の愛の心を識りえる者となるのだ。

自己は常に他者のなかにある。感動の心を発見しえた者が自らの感動の心を発見しえたのは、いろいろな人との出逢いによって人間の自然的感情である喜怒哀楽を経験し、共感能力を高めることができたからである。たとえ自分の人生のなかにおいて、自分を批判したり中傷したりする者があったにせよ、自分が感動の心を発見してみれば、そうした人間に対してさえ、感謝して受け入れることができるようになるのである。いいかえれば過去の事実のすべて、過去の環境のすべては、自らの自然的感情を豊かにし、他者との自己比較によって自らの心を見つめ直す機会を与え、さらにはまた自分の個性＝自己能力の発展に恵まれる機会を与えてくれたのであり、つまりは過去のすべての事実＝存在が自分自身を感動の心が発見へと導いてくれたのである。

そのお蔭ですべての人間、あるいはすべての事実＝存在に感謝の心を培えたとすれば、神に対する感謝の心が生みだされるのは当然のことである。

もとより人間の本質は、神と同様、無限の愛そのものである。人間には本来、すべての人間をかぎりなく愛する心があり、したがってまた神を敬う心が宿っているのである。

〔人間には〕同胞や宇宙の支配者によくおもわれたいという気持ちがあり、嫌われることを恐れる気持ちがある。それはまた人間が持っている同胞への共感と愛の心であり、結果を考えて行動する人間の利害打算を離れて、神の意思に従順に従う気持ちを生じさせる、神への愛と畏敬の念である（〔3〕『功利主義論』489頁）。

要するに人間には、最初からすべての人間や神の無限の愛を受け入れる心が備わっているのであるが、そうした隣人愛＝人間愛、ひいては神の無限の愛への認識は、感動の心が発見

によってこそよみがえってゆくのである。

4 感動の心は大自然との一体感に結びつく

第三に、感動の心を発見しえた者は、大自然との一体感を持って生きてゆくようになる。人間は大自然の存在なしにはけっして生きてゆけない。たとえば人間は、太陽があり、月があり、海があり大地があり、そうした大自然の力を借りて生きているのだ。その意味では人間は、大自然の力によって生かされているのだ。

感動の心を発見しえた者は、他者に喜びを与え光を与える存在を目指す。感動の心とは、大自然の心である。それは、与えるだけを与え、見返りを求めない心である。それゆえ感動の心の持ち主は、自らの感動の心を自己表現するためにのみ、生きるのだ。ましてや感動の心を発見するための対象は、理想的な人間にとどまらず、大自然の存在それ自体にも見いだされる。たとえば富士山に感動の心を発見した者は、富士山を描くことに使命を見だし、生涯を賭けて富士山を描き続けてゆく。したがって感動の心を発見しえた者は、二重の意味で大自然の心を理解し、大自然と一体化できる。人間と大自然の共生は、感動の心の発見いかんによる。

人間は大自然の素晴らしさを、絵や歌や映画に託すことができる。あるいはまた、とりわけ農業従事者や漁業従事者は、大自然の偉大さを識っているであろう。大自然の偉大さに感動しえた者は、大自然と一体感を持って生きてゆくことができる。

したがって人は、大自然と自分との一体感によって、おのずと神の無限の愛の認識へと結実する。なぜなら人間は、大自然の存在なしには生きてはゆけないが、その大自然は神の創造によるからである。

いうまでもなく人間は、空気を吸い、水分をとり、食糧を得なければ生きてはゆけないのである。その意味で、大自然こそが人間の生存条件をつくりだしている。大自然は、食糧や資源といった人間の生命や生活を支えるエネルギー源の宝庫といわなければならない。

神は無限の愛であるがゆえに、常に人間にかぎりない愛を注ぎ、人間を幸福へと導いている。神が大自然を創造したのもまた、すべての人間が幸福になるためである。ましてや人間は、大自然を創造することはできないのである。いかに高い英知を持つ人間であれ、太陽や月、海や川、大地や山をつくりだすことはできないのだ。

現代では、人間と大自然との共生がかつてないほど重要な問題となっている。

近代市民社会では、富の生産の3要素は、土地・資本・労働力である。農業部門であれ工業部門であれ、この3要素が富の生産の基本となる。

たとえば農業部門では、人間は土地に対し資本と労働力を投下し、はじめて土地生産物を

生産できる。このばあい、土地は大自然の一部であり、資本と労働力は人間の所有物である、と考えれば、富の生産物は大自然と人間との共同の成果といえる。

このことは、大自然の存在なしには、人間は生きてゆけない、ということを物語る。

人間が生きてゆくには、食糧の生産が不可欠であるが、たとえ人間が朝から晩まで働いたにせよ、大自然それ自体の存在がなければ、人間の努力は無に等しくなる。

たとえば食糧を産出する土地は、それ自身が生産力を持つために、優等地と劣等地とでは、その土地生産力に大きな程度の差が生じる。このゆえに土地には、土地法則が作用することになる。

土地からの生産に関する基本的法則、すなわち農業技術の状態が一定に与えられているばあいには、労働を増加しても、それに伴って生ずる生産物の増加は、それに比例するところよりも小さいものであるという法則が、作用しはじめる（〔1〕『経済学原理』Ⅲp. 712, ④22頁）。

ミルによれば、土地には分量に限りがあるため、資本蓄積の進展に伴い人口が増加すると、食糧供給の増大が必要となり、劣等地耕作が進展する。そして土地法則のゆえに人口増加につれて食糧生産は困難となるのである。要するに人間が従来と同じ労働時間だけ働いても、土地からあがる生産物＝土地収益は、人間の労働と比例しないことになる。

同じことは、漁業についても妥当する。大海や大河・河川には、人間の食糧源となる魚介類が生存しているが、それは有限であるため、人間が無思慮に取得してゆくと、やがて希少となる。

海洋の魚は、多くのばあい、事実上、分量に限りのない自然の^獲賜である。しかるに北氷洋の捕鯨漁業においては捕獲の費用を支弁するために、需要者が莫大な価格を支払わなければならないのであるが、それでも捕鯨の拡張によって現存の鯨の需要はよほど前から不足を告げている。そしてまた南方漁業は、大拡張をとげたのであるが、そのためやはり魚は尽きようとしているのである。河川の漁業に至っては、きわめて局限された天然資源であって、漁業を万人に無制限に許可したならば、魚はたちまち尽きてしまうであろう（〔1〕『経済学原理』Ⅱp. 30, ①73-74頁）。

となれば人間の努力の機会それ自体が激減することになる。以上は一例にすぎないが、同種の帰結がさまざまな生産部門で生じることは、もはや説明の必要もない。

このように考えると、人間は大自然の偉大なる恩恵を受けて生きている、ということが明らかになる。人間の生存は、大自然の存在を前提としてはじめて成り立つ。有史以来、それはすべての人間に共通する普遍的法則といわねばならない。その意味で富の生産は、超歴史的・自然的法則と想定できる。そして富の生産が大自然と人間との共同作業であるかぎり、そこには大自然の意思が反映されることになる。

ゆえに感動の心を発見しえた者は、神が自分のために与えてくれたすべての人間、すべての事実＝存在、したがってまた大自然の存在に感謝する心に目覚め、そしてすべての存在を創造し給うた神の無限の愛に感謝する心におのずと目覚めてゆくのである。

5 感動の心は自らの不完全と神の完全の認識に結びつく

第四に、感動の心を発見しえた者は、自らの不完全と神の完全を識る。

感動の心を発見しえた者は、神の無限の愛の認識に到達する。神の無限の愛の認識に到達すれば、おのずと人は自らの不完全を認識せざるを得ない。

神の存在を識らず、神の無限の愛の認識に到達していない時には、たれしも人は自己と他者とを比較して生きている。そのかぎり人は、人生を相対的な価値基準に照らし合わせて生きているのである。

なるほど人間にとって、自己と他者との相対的な比較はきわめて重要なことである。なぜなら人間は神の存在を認識しえぬかぎり、自分と他者との比較対照によって自己改善してゆくしか他に道はないからである。

自分自身の意見を他人の意見と比較対照することによって訂正し完全に近づけてゆくという着実な習慣は、……人の意見に正当な信頼をおくための唯一の確かな根拠となるのである（〔2〕『自由論』236-237頁）。

たれしも人は、自己を他者と比較対照することによって自分の短所や長所を見いだすことができるし、あるいはまた他者との競争によって自分の個性＝自己能力に磨きをかけ、ひいては自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し、感動の心を発見するに至ることができる。

しかし他者が不完全であるとすれば、人間それ自体を相手にしているかぎり、さらなる自己成長は見込めないであろう。それゆえ感動の心を発見しえた者は、ただすべての存在をありのままに認め、受け入れてゆけばよいのである。他者のことは神にゆだね、ただ自らは自らの仕事を通じて世に感動を、ひいては自らのかぎりない愛を伝える、という神に与えられた使命を果たしてゆくために、他人という人間それ自体ではなく、完全なる神と心をひとつ

にして毎日に全力を尽くしてゆかなければならないのである。

世に感動を伝えるためには、無限の愛なる神の存在に少しでも近づき、完全なる自分を目指して高い人格とかぎりない愛を自ら培ってゆかなければならないのである。

人間の仕事には、自らの心が素直に反映される。いいかえれば人の仕事を見れば、その人の心は手にとるようにわかる。

ゆえに世に感動を伝えてゆくためには、自らの心をこそ深く培い、自分自身を無限の愛そのものへと近づけてゆかなければならないのである。

したがって感動の心を発見しえた者は、自らの仕事に生命を託し、ただ愛ひとすじの道を辿ってゆかなければならないのである。

人間の自然的感情は、賢明な利己心によって道徳的になり、共感能力によって人を感動させる心を養い、その感動の心こそが自己主張を貫く力〔自らの心の奥底に宿る神の無限の愛の心をどこまでも貫く力〕を持つようになる（〔3〕『功利主義論』516頁）。

もとより人間の心の奥底には、神の無限の愛が宿っているのであり、神は常に自らとともに在るのである。その自分は、いわばもう一人の自分であり完全なる自分自身なのである。その自分自身は、いわゆる不完全なる自分自身を常に励まし、神の無限の愛の心を引きだしてゆくように導いてくれる。ゆえに感動の心を発見しえた者は、ただ自らの心との対話を通じ、不完全なる自分自身を改善し、完全なるもう一人の自分自身とひとつになるように努力してゆけばよいのである。

そうして神と心をひとつにして生きる時、人間のうちに宿る無限の力、無限の可能性が著しく引きだされてゆく。それにつれて人間は、神の無限の愛を自らの仕事を通じて世に伝えてゆくということが神に与えられた使命である、と心得て、自らの時代、そして次の時代へと自らのかぎりない愛を伝えてゆくことができるのである。

IV 人生には人間の幸福へ到達する一般法則がある

1 人生の一般法則

人の人生には、人生の一般法則がある。

人生の一般法則とは、まず第一に、人間は皆、自らの定めた人生の目標にむかって利己心を自由に発揮し、あきらめずに努力してゆけばその望みは必ず叶う、というものである（人生における成功法則＝利己心の法則）。

いいかえれば人間は、自らの人生における成功を目指し、その成功を信じて最後までやり抜けば、自ら望む成功をおさめることができるのである。

第二に、人間は利己心があるかぎり、人の望みはそれがひとつずつ叶うにしたがって、しだいに大きくなってゆくが、そうして高い人生の目標に向かって努力してゆくプロセスのなかで、人は自らの仕事を通じて自然的感情を陶冶し、知的・道徳的水準を高め、したがってまた共感能力を高めて、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し、感動の心を発見するに至り、公共心に目覚めるのである（人生における感動の心の法則＝公共心の法則）。

第三に、感動の心を発見しえた者は、自らの生命それ自体の尊さを発見し、神と心をひとつにして神の無限の愛の心を自らの仕事を通じて世に伝えてゆく、という神に与えられた使命を発見し、その使命のために自らの生命を捧げて生きてゆくのである（人生における神の無限の愛の法則＝感謝の心の法則）。

したがって人生の法則とは、利己心の発揮→感動の心の発見→神の無限の愛の心の発見という経路で自己実現＝人間的完成に辿り着く、という神が定めた人生の法則といえる。

要するに人生とは、人間の本質である無限の愛に立ち戻ってゆくプロセスであり、いいかえればそれは、神に与えられた使命を発見し、その使命を果たしてゆくプロセスなのである。

およそ人間は、人の生きる目的が神に与えられた使命を果たしてゆくことにあり、ということを経験から認識して生まれてきているわけではない。

しかし神は、人間一人ひとりに使命を授けてこの世に登場させているのである。

したがって神は、最初から人間一人ひとりの使命を識っている。それゆえ神は、神が人間に与えた使命から逆算して、人間一人ひとりに生命を与え、人間一人ひとりがその使命を発見し、そしてその使命を果たしてゆくように導いてゆくのである。

その意味で人の人生は、神の意思によって最初から決定づけられている、といえるのである。それは人の人生には運命がある、という意味ではけっしてない。それは、人の人生には神に与えられた使命がある、という意味である。

およそ人間は自分の人生が自分の望むように進展しないと、その原因を他者や社会の責任におしつけ、自分は運が悪かったなどと愚痴をこぼすが、しかし世に幸や不幸という偶然は存在しないのである。

神が人間を創造した目的は、すべての人間が幸福になるためにこそある。神は完全かつ絶対なる存在であり、同時にまた無限の愛なる存在である。その神の意図が人間の幸福にある以上、人間は皆、最初から幸福になるように創造されているのである。

神が人間を創造した目的は、人間の幸福を望み給うためである。……神の全智全能を信じる

功利主義者〔自らの成功を信じる者〕は、……必然的に神が……功利の要求を最高度に満たしてくれる〔神が必ず望みを叶えてくれる〕、と信じる（〔3〕『功利主義論』482-483頁）。

神が人間にあらゆる人間的諸能力を与えたのは、あらゆる人間の能力が育成し開花するためにこそある。……そして神は、人間が自分自身の心に描いた理想的概念に少しでも近づくにつれて、……喜ぶのである（〔2〕『自由論』286頁）。

したがって人間はたれでも幸福になれるのである。

それゆえ人の人生において、運命はけっして存在しないのである。

人間は幸福になろうとおもえば、必ず幸福になれるのである。世に自分を不幸と嘆く者があれば、その原因はひとえに自分自身の心の持ち方にあるのである。

人の人生における成功は、すべて努力の^{たすけ}賜である。しかし人がその成功を運命や偶然の結果である、と考え、そのように信じるや、それに比例して人の妬み心はその国の国民性の特質となってゆくのである（〔4〕『代議政治論』399頁）。

人生の変転その他まなならぬこの世への失望は、主としてはなはだしい無分別や自己統制を誤った欲望の結果であり、そうした人間のつくりだした不完全な社会制度の結果である（〔3〕『功利主義論』476頁）。

しかし一体、人間の幸福とは何か。

結論からいえば、それは自らの心に宿る神の無限の愛に目覚め、その愛を自らの仕事を通じて世に施してゆくことにある。いいかえれば人間の幸福とは、自分と同等に隣人やすべての人間を愛し、すべての事実＝存在を受け入れつつ、自らのかぎりない愛を神に対して示してゆくことにあるのである。

したがって人間が幸福になるためには、何よりもまず、自ら定めた人生の目標にむかって利己心を自由に発揮し、そのプロセスのなかで感動の心を発見し、自らの心に映じた感動を世に伝えてゆくために、ひいては神と心をひとつとし神の無限の愛を世にあまねく伝えてゆくという使命に目覚める以外に道はないのである。

いいかえれば人間の幸福とは、神に与えられた使命を果たしてゆくプロセスのなかにある。

そのために神は、すべての人間に対して神の法則、すなわち人生の法則を適用してゆく。その法則とは、まず第一に人生の成功法則＝利己心の法則であり、第二に感動の心の法則＝

公共心の法則であり、そして最後に神の無限の愛の法則＝感謝の心の法則なのである。

以下、簡単にこのことを説明してみたい⁽³⁾。

2 人生の成功法則＝利己心の法則

神は人の人生の最初のプロセスで人生の成功法則＝利己心の法則を適用してゆく。

人生の成功法則＝利己心の法則とは、人が自らの人生に成功をおさめたい、と欲し、人生に託する望みをひとつに絞り、その望みを成就するために利己心を自由に発揮してゆけば、必ずその人の望みは成就する、という神が定めた人生の法則である。

たれしも人は、この世に生まれてきたからには、自分の人生に成功をおさめたい、と欲するであろう。

成功とは何か。それは、文字どおり功を成す、という意味である。

功とは、一言でいえば地位であり名誉であり、名声である。

何よりもまず人は、その功を手に入れたいのである。

というのは人間には、利己心というものが備わっているからである。

人間の利己心とは、自分の存在価値を他者や社会に認めてもらいたい、そして自分の成すことに共感し、賞賛してもらいたい、とおもわずにはいられない人間の本能である。

すべての人間の心に、そうした利己心があるかぎり、人間は皆、ひとかどの人物となって功を成し、人生に成功をおさめたい、と欲するのである。

世に登場してきた以上、人が求めてやまぬ最大の望みは、自分という人間の存在を広く高く評価してもらいたい、ということ以外には存在しない。

そして神は、その人間の切なる望みを、いとも簡単に叶えてくれるのである。

たとえば神は、歌手になることを望む者には歌手としての地位・名誉を与え、科学者になることを望む者には、科学者としての地位・名誉を与えてゆく。

ゆえに人間は皆、自分の望みをひとつに絞り、自らの意図した人生の目標に向かって努力してゆく時、ひとつの成功をおさめ、利己心を満たしてゆけるのである。

それはなぜかといえば、神の視点で考えれば、人の望みが叶うのは当然のことなのである。神は人間一人ひとりに自分本来の個性＝潜在的自己能力をあらかじめ与えているのであり、人間一人ひとりがそれに目覚めるように、最初からその人間にとって最もふさわしい環境を与えているのである。たとえば歌手が歌手になりたい、という望みを抱くのは、その人物が最初から歌手としての才能を有しているからであり、同時にまたその才能が引きだされるような環境、すなわち両親や友人・知人、教師といった人物との出逢いを与えられているからである。したがって歌手が歌手になるという望みを持つようになるのは、当然のことなのである。

ある。

〔人間は自分の望む成功をおさめると、〕自分がそこに生まれてきた環境は、自分自身にとって宿命的な事柄なのである、と考えるようになる。そうして過去を振り返ると明らかに人と人との出逢いは、……神の意思によってすべての人の利益が考慮された関係の上に成り立っている、としか考えられなくなるのである（〔3〕『功利主義論』493頁）。

このことは、すべての人間についても同じことがいえる。

貧しい環境のもとに生まれた者は、その貧しさゆえに金持ちになりたい、あるいは有名になりたい、という望みを持つようになり、自らに与えられた環境のなかで出逢った人びとの励ましや支えによって、企業経営者や学者や作家や、それぞれの個性＝自己能力に見合った明確な望みをひとつに絞り、それぞれの人生の目標にむかって努力し、その望みを叶えてゆけるのである。

神はひとえに無限の愛である。無限の愛なる神は、それゆえ人が自らの望みをひとつに絞り、自ら定めた人生の目標にむかって努力してゆく時、その望みを素直に受け入れてくれるから、たとえ他者がその人物の望みの成就が不可能だ、と考えたにせよ、その人物自身が自らの成功を信じ抜いて努力してゆけば、必ずその望みを叶えるように導いてゆくのである。

たとえば歌手になることを望む者は、自分を歌手にしてくれる人物と出逢ったり、自分の歌手としての能力を認め鍛えあげてくれる人物と出逢ったりする、という奇跡ともおもえる出逢いに遭遇したりするのである。

神の配剤がなければ人の人生は幸福の源泉が極めて乏しいものとなるだろう。だが神の配剤は存在するのだ（〔3〕『功利主義論』499頁）。

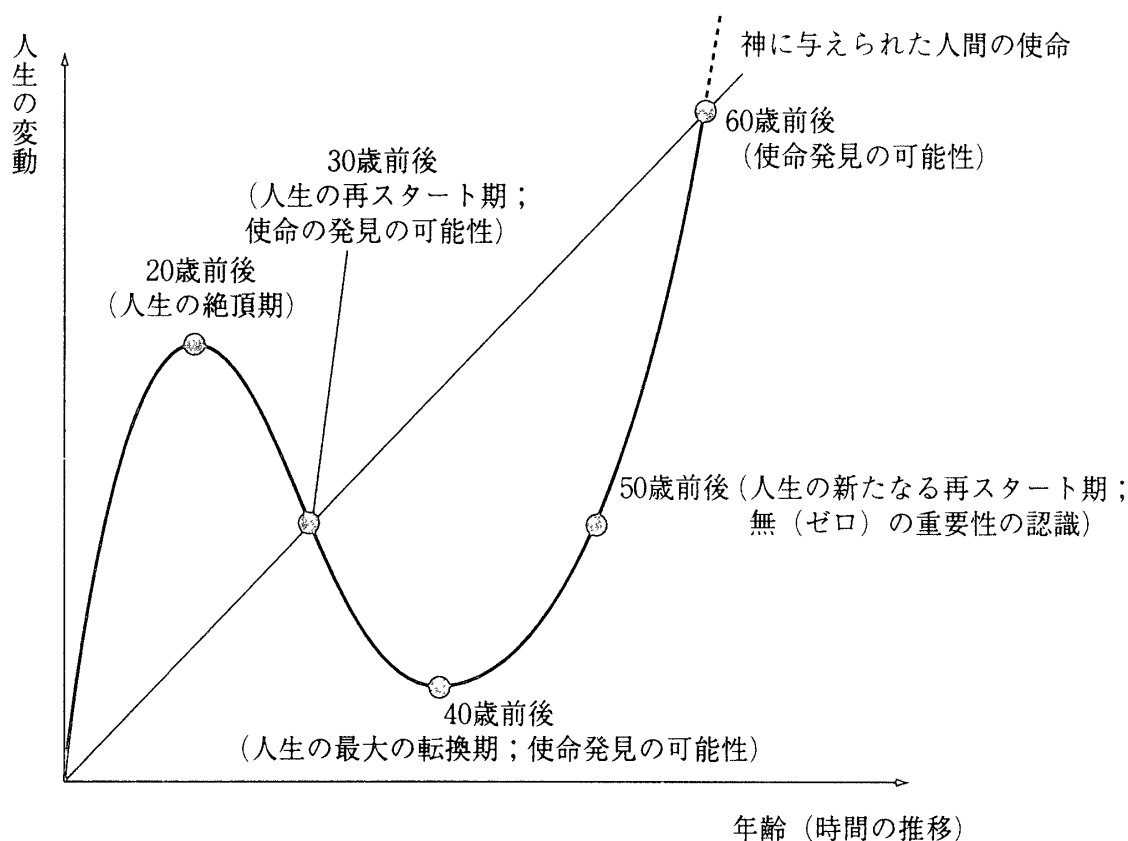
ゆえに一般に人は、最初に自分に与えられた環境のなかで出逢った他者の存在を通じ、自らの個性＝自己能力に見合った望みを発見し、その望みを叶えようと人生の目標を設定し、その目標にむかって努力してゆけば、20歳前後には自らの望みは叶うのである。

3 感動の心の法則＝公共心の法則

人の人生の次のプロセスでは、神の法則＝人生の法則は、しかし人の望みが叶うやいなや、感動の心の法則＝公共心の法則として適用されてゆく。

人間の視点で考えれば、自分の望みが叶うということは、自分自身の努力の結果であり、

人生の一般法則



- * 縦軸は、人の人生の変動、一般的に言えば人生の山と谷（人生の浮き沈み）を表示する。
- * 横軸は、年齢（時間の推移）に伴う人間の意識の向上＝人間の知的・道徳的水準の向上と神に与えられた使命を発見するに至るプロセスを表示する。
- * 右肩上がりの直線は、神に与えられた使命の道を表示する。人間は最初から神に与えられた使命の道を辿っているが、感動の心を発見し、その使命を発見する可能性は30歳前後から10年に一度訪れる。
- * 人の人生は、20年でひと区切りであるようにおもわれる。最初のおよそ20年前後は、人生の目標に向かって利己心を自由に発揮し、自ら望む成功を手に入れる。それは、自分のために生きる人生のプロセスである。つぎの20年前後の期間は、社会の一般的な利益の増大、つまり世のため人のために生きる人生のプロセスである。具体的には30歳前後で試練を経験し、自らの使命を発見する可能性が与えられる。そこで使命を発見すれば、右肩上がりの直線上、つまり神に与えられた使命の道を自らの意識と自覚とを持ってつきすすむようになる。しかしそこで使命に気づかないと、40歳前後で人生最大の試練に直面する。しかし大ピンチは大チャンスである。その試練によって自らの使命を発見すると、40歳前後は人生最大の転換期となる。しかしそこで使命を発見できないと、50歳前後の年齢の時、30歳前後の年齢の時と同様、すべてが無（ゼロ）になるような経験を与えられ、そして60歳前後で自らの使命をようやく発見しうる可能性が与えられる。40歳前後から60歳前後までの20年間は、使命を発見する最後の機会ともなりかねない。60歳以上の年齢の人生のプロセスについても、およそ同じような経路で20年周期で人生の展開が変わるものと推察される。
- * 尚、以上は、すべて仮説である。

自分の個性＝自己能力が高まった成果である。

いかに神があらかじめ人間一人ひとりにすぐれた才能を与えていようと、人間自身がそのことに気づき、自ら人生の目標を設定し、積極的に努力してゆかなければ人の望みは叶わない。

したがって自らの人生に成功をおさめる者は、努力する者であり、自分の個性＝自己能力を鍛えあげてゆく者といえる。

それゆえ自らの望みを叶え、自らの人生にある一定の成功をおさめた者は、自分の個性に磨きをかけ自己能力を著しく高めた者であるがゆえに、社会的賞賛＝共感を受け、自らの存在価値を高めてゆく。その結果、仕事は増え、社会的地位や名声は高まり、収入も増えて生活水準を高めてゆくことになる。

歌手を目指した者は歌手となり、経営者を目指した者は経営者となり、学者を目指した者は学者となり、それぞれに自らの才能を生かして活躍してゆく。

そうして自分の才能が高く広く認められてゆくこと、つまり自分の生命が世に大きく生かされてゆくことに対し、素晴らしい人生になったと、自分自身に感謝する心が生まれれば、おのずと他者や社会に対する感謝の心が養われてゆくはずである。

というのは人は、自分の望みが叶うや、自分がある一定の成功をおさめることができたのは、けっして自分ひとりだけの力ではなく、多くの人の恩恵を受けた成果である、とおもえるはずだからである。

だが一般に人は、現実には、自分が自分の望む成功をおさめるや、自分のために家を建て、高級車を買ひ、自分個人の見栄や虚栄心にこりかたまり、自分をよく見せたいというだけで、自らの才能、いいかえれば自分の個性＝自己能力を世のため人のために使おうとしないのである。

そのために人は、傲慢になったり自惚れたりするようになり、他者に対しても傲慢な態度を振るまうようになり、大きな借金を背負ったり、贅沢な生活に明け暮れるのである。

自分の心は自分に返る。それが人生の法則の基本である。自分に対する自惚れや過度の自信や、あるいは他者に対する横柄な態度は必ず自分の人生に反映する。

これまで自分の望みが容易に叶ったからといい、これからもまた自分の望みは叶うとおもひ、他者に対する感謝の心を忘れ、他者に対する謙虚な心を失うと、常識的に考えても、自分の周囲にいる人びとはおのずと自分のもとから離れてしまうことになるのである。

そうして人は、自らの望みを叶えた直後から人生の下り坂を転がり始め、30歳前後には、それまでの努力の成果のすべてを失ってしまうことになるのである。

神の視点で考えれば、それは筋書き通りの人生である。神は、人の人生の出発点において

は人の望むものをすべて与えてゆく。が、その直後には、神は人間に与えたものをすべて奪い取ってゆくという法則を適用させてゆくのである。

たとえば歌手になった者は、一時的には CD やレコードが売れたり人気を博してゆくが、その直後からヒット曲がでなくなったり、人気が急速に落ちてゆくのである。

あるいはまた経営者は自らの努力によって、大きな利益を獲得し、事業を拡大してゆくが、その直後には不景気などの予想せざる事態が発生し、大きな借財をかかえて倒産するという事態がしばしば生じてくるのである。

そうして神は、人に無(ゼロ)の重要性を教えてゆくのである。

およそ人間は、ひとまず自らの望みを叶え、一定の成功をおさめると、地位や名声は飛躍的に高まり、収入もまた増えるが、それにあぐらをかいて贅沢三昧の生活を成せば、おのずと借金が重なり、あるいはまた事故や病気になったり、肉親を失ったり、離婚したり、といった不遇の事態に陥り、神に大きな試練を与えられてゆくのである。

そうした事態に直面すれば、おのずと人は自分の生命さえあれば、もはや他に何もいらぬ、という無の境地に達し、自らの生命の尊さを自覚し認識するに至るであろう。

たとえば経営者は大きな借金ができれば、その借金がゼロになるならばどれほど嬉しいだろう、とおもうのである。

そうした事態に直面する時期が30歳前後である。

もとより神は、全体の調和＝幸福のために役立つように人間の本性を与えている。すなわち神は、人間本性として利己心に加え公共心というものを与えているのである。

そのかぎり人間の生命は、私的にではなく公的に使用されて、はじめて自然的状態となるのである。

しかし一般に人間は、悲惨な経験をしなければ、自らの生命の尊さに気づくことができず、したがってまた人間それ自体の生命の尊さに気づくことができないのである。だからこそ神は、30歳前後においてそれぞれの人間に試練を与え、人間の生命の尊さに気づかせるのである。

事故や病気、倒産や離婚、そうした様々な試練に直面してはじめて人は、人の心の痛みを理解し、あるいはまた他者に対するおもしろいや、優しい心を培って、これまで以上に多くの人びとに対する共感能力を養ってゆけるのである。

その一方では自らのおかれた苦境を乗り越えるため、より高い人間に対する共感を示し、すぐれた人物の人生や経験に学び、自らの人格と能力を高めてゆくのである。

そうして人は、自然的感情を豊かに培い、共感能力を高め、より多くの人びとの心を受け入れる器量を養い、およそ十年の歳月をかけて新たな自分自身を築きあげてゆくのである。

そうして40歳前後には、人生の最大の転換期を迎えることとなる。たとえば歌手であった者は、作詞作曲を手がけ、実は自分の使命は歌手であるというよりもむしろ、作詞家であり、あるいは作曲家である、というように、自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見するに至るのである。

そして経営者は、自らの生きる意味が金儲けのためではなく、自らの才能を世に大きく生かして社会的利益の増大＝人間の幸福のために貢献することにあると認識し自覚するに至るのである。

学者はまた、自らの学び得た知識を生かして全人類の幸福の実現のために貢献することこそ自らの使命があるのだ、と気づくようになるのである。

したがって人の人生においては、40歳前後が幸福の価値転換期になる。たとえそれまで人間の幸福とは、私的利益の増大＝物的利益の増大であると考えていた人間にせよ、40歳前後には自らの使命を認識し自覚する出逢いを与えられ、人間の幸福とは自らの生命、すなわち自分本来の個性＝潜在的自己能力を世に大きく生かして人類全体の幸福のために自分自身の生命それ自体を使用してゆかなければならない、という意識に到達しうるのである。

その意識によって、およそ十年の歳月を経て50歳前後になれば、もはや自らの生命されあれば何もいらぬ、という境地に達し、私利私欲を捨てて自らの感動の心を世に伝えてゆけるのだと切実におもえるようになる。

要するに人は50歳前後には、無（ゼロ）の重要性を切実に認識できるように定められているのである。もとより人生50年という言葉があるように、人の人生は50歳前後に無の境地に到達するように、神が定めているのである。

たとえば織田信長にせよ島津斉彬にせよ、西郷隆盛にせよ人生50年という境地で、自らに与えられた人生を生き抜いてきたのである。

その無の境地に到達しうれば、人は生命を惜しまず、地位や名声を追わず、ただひたすらに自らの心に宿る感動を世に伝えてゆくために全力を尽くして生きることになる。

50歳前後から60歳前後までのおよそ十年間は、まさに世のため人のため、ひいては社会や国家、全人類の幸福のために生命のかぎりを尽くしうる人生最高の歳月と成りうるのである。

もはや60歳ともなれば、人はただ神の無限の愛に近づくために、何事をも恐れずにただひとすじの愛を貫いて神と心をひとつにして、神の無限の愛を自らの仕事を通じて世に伝えてゆくことに自らの使命を見いだし、自己実現＝人間的完成を目指し、生命を燃やし尽くすのである。

それ以後の人生が与えられている者は、自らの生命がさらにまだ世に必要とされているという証だ^{あかし}と心得て、ただ神と心をひとつにして、自らの心に宿る神の無限の愛を、自らの生

きる時代に、ひいては来たるべき輝かしい時代の訪れのために生命を注いでゆくべきであろう。

いずれにせよ神は、人間一人ひとりに使命を与えて、その生命を与えているのである。そして神はその使命から逆算して、人間一人ひとりに環境を与え、出逢うべき人物との出逢いを与え、そうした他者のなかに自らの心が映し出されるように配慮し、そこから人の人生に生きる望みを与え、利己心を自由に発揮せしめ、自ら意図する人生の目標にむかって努力してゆくプロセスのなかで、自らの心に宿る感動の心を掘り起こし、生命を賭けるにたる価値の発見をもたらし、感動の心を自らの仕事を通じて世に伝えてゆくことにこそ人の生きる意味があることを教え、さらにはその感動を世に伝えてゆくために、神の無限の愛の心に目覚めさせ、人は愛ゆえに人となり、という認識をもたらして、神の無限の愛の心を自らの生きる姿によって世に伝えてゆくことにこそ、人の生きる目的はあるのだ、と自覚せしめて、人の生命を燃やし、燃焼させ尽くすのである。

それゆえ人の人生は、神に与えられた使命を果たすために与えられているのであり、人は神に与えられた使命を果たし終えた時に、神に生命を召されるのである。

総じていえば、それが神の法則＝人生の法則なのである。

したがって人の人生は、あらかじめ神によって定められている。

たれであれ人は、神の与えた使命を担って世に登場しているかぎり、必ずや自らの心に宿る神の無限の愛に目覚め、人間は愛そのものであるという認識に到達して世を去り、そしてふたたび、新しい時代のなかで神に与えられた使命を担ってよみがえるのである。

その意味において人間の生命は永遠なのである。

V おわりに

ミルの考えでは、人間の生命とは、ひとえに自分本来の個性＝潜在的自己能力である。それゆえ自分本来の個性＝潜在的自己能力を発見し、それを最高度に発揮しさえすれば、人間は、自分の生命を世に大きく生かすことができるのである。

自己の発見とは、自分本来の個性＝潜在的自己能力の発見である。その意味での自己を発見しえたとき、はじめて人間は自分の心のなかに深く眠る感動を呼び起こすことができるのである。したがって自己の発見とは、自分自身の生命の発見であり、つまりは感動の心の発見に他ならない。

およそ人間は、自己の発見＝感動の心の発見に至るや、人生を一変させる。そもそも感動とは、これさえあれば他にはもう何もいらぬ、という人間の自然的感情からおのずと湧きあ

がる至上の喜びの感情である。それゆえ感動の心を発見しえた人間は、目先の私的利益に惑わされず、自分の心に映じた感動を自己表現し、それを世に伝えてゆくことのなかに人生の喜びを感じるようになる。自分の感動を自分の仕事を通じて世に伝えたい、とおもうとき、そこにはすでに見知らぬ他者のために自己能力＝自分の生命を使いたい、という公共心を培った自分が存在するのである。したがって自己の発見＝感動の心の発見に辿り着いた人間は、自分に与えられた使命を明確に自覚しえている。なぜなら人間の使命とは、自分の生命を社会的利益の増大のために使用し尽くすということであり、明確な自己意識をもって自分本来の個性＝潜在的自己能力を社会的に還元するということに他ならないからである。

見方を変えれば、自己の発見＝感動の心の発見とは、自分の心に潜む理想的人間像を他者への共感によって発見することである。いいかえればそれは、自己の完成した将来的姿を示す理想的人間像の発見といえよう。それゆえ感動の心を発見しえた人間は、現実の未熟で不完全な自分をその理想的な人間に近づけるべく最大の自己努力を払い、自己実現＝人間的完成を人生の目的と見定めるようになるのである。

かくて自己を発見し、感動の心を発見しえた人間は、その感動を世に伝えるという使命達成にむけて自己を確立せしめ、さらには自分自身の自己能力と自然的感情との訓練・陶冶を通じて人間的完成を目指すようになる。その結果、自分に厳しく他者にやさしい人間へと成長し、より多くの人間を素直に、そして謙虚に受け入れられるようになるのである。

このように考えると、自己の発見＝感動の心の発見は、人間にとって極めて重要なことである、といわねばならない。というのは人間は、自己の発見＝感動の心の発見に至れば、神に与えられた使命を自覚し、神と心をひとつにして生きてゆける人生を築きあげることができるからである。

さらにこのことは、個人と社会との調和を実現するためにも、極めて重要なこととなる。いうまでもなく人間は、自分ひとりの力だけでは生きてゆけない。たれもが互いに支えあい、助けあって生きている。その意味で人間は、疑いもなく見知らぬ他者の多大なる恩恵を受けて生かされているのである。このことを識れば、人間はいかに自分自身に存在価値があるか、またいかにいまの自分の仕事に社会的価値＝創造的価値があるかを理解することができるだろう。

ミルの考えでは、人間は、たとえいかなる困難や悲惨な現実直面したにせよ、それを克服しようとする気概をもてば、多くのばあい、ほぼ完全にその問題を解決できる。

人間の苦悩の主な問題の根源はすべて、人間の配慮と努力によって大部分——その多くは、ほぼ完全に克服できるのである（〔3〕『功利主義論』476頁）。

何事にせよ、これは実現できない、と一定の限界線を設けるのは、人間自身である。しかし実は、人間の心に垣根^{かきむ}はない。やろうとおもえば、解決可能な問題は、自分の人生にも社会にも山ほど存在する。が、ただ手をこまねいていては、解決できる問題も解決には至らない。

窮乏は、どんな意味でも苦悩を生むが、やがて社会の英知が人間の良識および先見に支えられて、完全にこれを絶滅させるであろう。人類の強敵中、最もてごわいものであるあの病気でさえ、適切な体育と道德教育を与え、さらに有害な影響を最大に統制すれば、かぎりなく病は絶滅してゆくであろう。他方、科学の進歩は窮乏や病気、その他いまわしい人類の敵を、将来においてもっと直接的に克服する希望を与えてゆくであろう（〔3〕『功利主義論』476頁）。

それゆえ人間にとって最も大切なことは、何かを成し遂げたい、とおもう心なのである。人間一人ひとりが自分の仕事に使命感をもって従事すれば、社会にまつわる経済的・政治的矛盾を著しく減少するばかりか、隣人愛＝人間愛に満ちた社会さえ実現可能である。

したがって矛盾に満ちた自分、社会、国家、ひいては世界の現実を打破するためには、それを生みだした自分自身あるいは人間自身の意識を高める以外には、根本的な手だてはありえない。そこにミルは、人間の意識革命を導く自己の発見＝感動の心の発見の重要性がある、と考えたのである。

実をいえば人間は、ただ生命を与えられているというだけでも、そのことに心から感謝できさえすれば、感動の人生を歩めるのだが、その認識と自覚に到達していないばあいには、自分の心に素直に従って生きること、つまり自分の本当にやりたいことからやり始めること、あるいはいまの自分が従事している仕事に真剣に取り組むことが大切である。

人間の能力は、使用すればするほど、開花・発展を遂げる。それゆえ基本的に人間は、自分に与えられた仕事に感謝し、全力で従事すれば、知的・道徳的に成長し、また多くの経験を通じて豊かな自然的感情を培うことができる。それによって共感能力が向上すれば、たれしも人は、見知らぬ他者との出逢いのなかで、自己の発見＝感動の心の発見に辿り着くことができるのである。

そうして一人でも多くの人間が、自分の感動を自分の仕事を通じて自己表現し、自分に与えられた使命を果たしてゆけば、それだけ意識的に社会的貢献を成す人びとが増えてゆくだろう。その結果、社会的共感の質が高まれば、人間の高い意識に支えられて社会改良がすすみ、互いに互いをおもいやり、互いが互いのために尽くすという愛の絆で固く結ばれた健全

な社会が形成されてゆくであろう。

そうした社会のなかで、大多数の人びとが人間愛を培えば、たれもが一人は万民のために、万民は一人のために積極的に尽くせるようになるだろう。そこに人間の自然的状態があるのだ、とミルは強く信じたのである。

たれであれ人間は、自分の心に素直に従って常に明るく前向きに生きてゆけば、必ずや自己の発見＝感動の心の発見に辿り着き、それを人生の転機として自分本来の個性＝潜在的自己能力をを世に大きく生かしてゆく神の無限の愛の道を突きすすんでゆけるのである。

神は、人間に使命を与えてこの世に登場させている。したがって人の人生は神に与えられた使命を発見し、その使命を果たしてゆくプロセスである。そしてそのプロセスは、最初から神の意思によって定められているのである。いいかれば人の人生は、あらかじめ神の意思によって定められているのであり、その意味で人の人生は神の意思によって決定づけられている。すなわち神は、あらかじめ人間一人ひとりに与えた使命から逆算して、人間一人ひとりの生命をその人にとって最も適切な環境のもとに送りだし、そこから人の人生を開始させるのである。そして神は、まず人の人生に望みを与え、その望みを叶え、次にはさらに高い人生の目標にむかって利己心を発揮してゆくプロセスのなかで、感動の心を発見せしめ、ひいては神の無限の愛に目覚めさせてゆくのである。

要するに人間は、常に神の意思によって神に与えられた使命を発見し、その使命を果たしてゆく方向に導かれているのである。それゆえ神の視点にたてば、人の人生は最初から決まっているのである。このことを識れば人は、常に自らの心に素直にしたがい、自分に与えられた仕事に全力を尽くしていれば、必ずや感動の心を発見し、ひいては自らの心の奥底に宿る神の無限の愛の心に目覚め、神と心をひとつにして、かぎりない神の愛を自らの仕事を通じて世に伝えてゆくという使命を果たしてゆけるのである。

注)

- (1) J.S.ミル『経済学原理』からの引用に関しては、参考文献に掲示した Mill [1] を使用した。たとえば (II p. 217, ②51頁) と表示したものは、左が Collected Works II の217ページからの、右が岩波文庫の末永茂喜訳の第二分冊51頁からの引用を示している。また Mill [2], [3], [4] からの引用に関しては、() 内に邦訳のページ数を表示した。Mill [1] — [4] までの引用文中の [] 内の文章は、すべて引用者のものである。上記の引用文の邦訳に関しては、引用者が適宜改訳した。
- (2) J.S. ミルの政治経済学体系に関する研究書としては、前原 [5] を参照されたし。
- (3) 人生の一般法則に関する具体的な考察に関しては、今後の研究課題とさせて頂きたい。本節では、本論文で展開した人生の一般法則にしたがって、歴史上の人物 (たとえば織田信長、豊臣秀吉、石田三成、徳川家康、島津斉彬、西郷隆盛、ソクラテス、イエス・キリストなど) や神に与えられた才能を十分にひきだして活躍して世を去った人物たちの人生を参考資料として、ひとつの仮説を提唱した。

参考文献

- [1] Mill, J. S., Principles of Political Economy, with some of their applications to social philosophy, 7th ed. 1871, in Collected Works of John Stuart Mill, Vol. II—III, Univ. of Toronto Press, London, Routledge & K. Paul, 1965. (末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫, 第1-5分冊, 1959-63年)
- [2] Mill, J. S., On Liberty, 1859, in Collected Works, Vol. XIV, 1977. (早坂忠訳『自由論』中央公論社, 1967年)
- [3] Mill, J. S., Utilitarianism, 1861, in Collected Works, Vol. X, 1969. (伊原吉之助訳『功利主義論』中央公論社, 1967年)
- [4] Mill, J. S., Considerations on Representative Government, 1861, ed. by Harper & Brothers, New York Univ. Press, 1862. (山下重一訳『代議政治論』中央公論社, 1967年)
- [5] 前原正美『J. S. ミルの政治経済学』(白桃書房, 1998年)